

いゴルフ場、ボーリング場、パチンコ屋、その他たくさん。でも子どもたちがのびのびとあそんだり、保育される場所は少ないのです。広い幼稚園、保育園がたく

さんできたら、経費も安く、そして、子どもも本当に幸せです。子どもを大切に政治をしてほしい、本当にそう思います。

ミニコミ

編集部

『雨堤だより』という手書き、ガリ版刷の「新聞」がある。緑区若草台の雨堤自治会報で、主婦の桂三津子さんが一人で取材し、ガリを切っている。初めは手書きの回覧版だったのが、自治会発足と共に月刊のガリ版刷りになった。形も小さく発行部数も少ない、マスコミならぬミニコミである。

教育文化センター地階の広報センターには、このようなミニコミ紙・誌が壁一面に展示されている。ここへ発行のたびに送られてくるミニコミは約三百。全市で発行されているミニコミ総数からすればほんの一部だろうが、多種多様なミニコミをみる事ができる。いちばん多いのが自治会・町内会の会報だ。一人、二人の人が出している個人紙もある。数は少ないが最近増えてきているのが、各地の消費生活コンビオンの人たちが作っている消費生活関係のミニコミである。ガラ紙に手書きの騰写印刷のもの、タイプオフセット印刷のもの、新聞活字を

使い本格的な新聞の体裁を整えたものなど、その形も多様だが、タイプオフセットのものが比較的多いようだ。発行間隔も、不定期、数カ月に一回、月刊などいろいろだが、月刊がかなりある。発行部数は数百から多くても二千ていどまで。

横浜市内全体ではどれくらいミニコミが出されているかは、正確にはまだ把握されていないが、数千にのぼると推察される。一般の新聞、雑誌などの「マスコミ」には出ない、身近な、細かいお知らせ、話題や生活の場の語りかけ、主張などが、これらの「ミニコミ」にはあふれている。

地域の中心となっている自治会、町内会の会報についてみてみよう。

郊外のある住宅団地自治会の会報は、タイプ印刷のガラ紙を綴じた回覧であった。回覧が終るまでに日数がかかる、すぐ回さなければならぬから忙しいときなどといねいに読めない、手もとに置けないから内容を忘れやすい、昼間いない

亭主族は見る機会が少ないなど、問題が多かった。そこである年から思いきってオフセット刷の新聞の形の会報を全世帯に配ることになった。それまでの月二回刊が月刊にはなったが、スペースも増え、役員会の決定、各専門部や各棟の活動、サークルの話題などが詳しく伝えられるようになった。全体の動きがひとめでわかると好評であった。団地の暮しをめぐる発言、自治会活動への意見なども紙上で活発に交された。その一年でサークルが新たに六つ生まれ、翌年の自治会総会出席者は前年よりも三割増えたという。

全市で二千以上ある自治会・町内会のほとんどが、会員に会の活動を伝える手段として、何らかの形で会報を出しているとみられる。ガラ紙にガリ版刷のもの、それも回覧形式のものが少くない。だがタイプオフセットや活版の会報を出しているところも、郊外の新しい団地自治会などにかなりみられる。自治会・町内会の活動はともすれば役員だけのものになりがちだが、どんな形であれ会報が存在することによって、会の活動が会員に広く知らされる役割は大きい。また執行部の動きからサークルの話題に至るまで、きめ細かく「伝える」ことがきっかけとなって、一般の住民の参加意欲を起こさせ、新たな活動を生み出すことにもなっている点も見逃せない。

いずれの場合も、編集の実務を担当する人を得にくいという悩みを共通してかえている。会報づくりはめんどうな仕事だという感じがあることと、何か特殊な「技術」がいりそうだと考えられていることが、その原因のようだ。

広報センターに並んでいるミニコミの中で、技術的にしっかりして読みやすい感じのものについて調べてみると、新聞・雑誌の編集に関係のある人がかわっている場合が少なくない。そしていちど「技術」が持ち込まれると、人は代っても受け継がれている。きっかけが必要なのだ。

「ミニコミの技術」といってもたいして難しいものではないのですが、そのごく簡単なコツを知っていると知らないのでは、出来上ったものの読みやすさがうんとちがってくるのですよ」と、あるミニコミ編集者は話している。「なかでも大事なのが見出しのつけ方です。ガリ刷りの簡単なものでも、具体的に内容がわかる見出しをつけることが、読みやすさのポイントですよ」。

ミニコミに何を盛り込み、何を主張するかは市民が考えることであり、それが親しみやすい、読みやすいものになるような編集技術を市民が修得できるように援助することが、行政に求められているようだ。

